

## 西川一廉氏の報告をめぐる討議

西川一廉氏は、実験心理学と学習理論からST理論を経て motivation と morale 論を研究され、現在は職務満足の産業心理学的研究に就かれています。本報告は、産業心理懇話会での討議に基づいて、「現代日本における勤労者ライフスタイルについて—その心理学的考察」であり、経済的不況、昇進の失敗、出向という左遷、肩たたきの追い出し作戦とうからくる不安動因に駆られて、会社絶対主義でひたすら自己犠牲を続ける中高年の勤労者の意識分析をするものであった。心理学的見地から、不安動因に駆られる勤労者たちに、自己犠牲を課することなく、生活の充実を計ることが大切であると、西川一廉氏はいうのである。つまり、それは、飢餓体験もなく、不安動因から独立した「新人類」的ライフスタイルを、働き蜂の中高年の勤労者たちに求めることになるともいえる。

全景泰氏（啓明大学）は、日本の勤労者のライフスタイルが終身雇用・年功序列そして日本的労使関係の三つの特色があるが、これらは欧米人から非民主的で非人間的だという批判を受けたと思うと、言う。しかし、全氏自身は、日本人の勤労意識はマスローの欲求五段階説の自己実現欲求にあたると思うがどうか、また西川氏のごとく不安動因に駆られて勤勉であるとする、将来それが解消されたとき社会的生産性はどうなると思うか、むしろ、日本企業の勤労者は生活者としての側面が余りにも自由すぎて、逆に会社の仕事で一所懸命に励むのではないかと、言う。

朴命鎬氏（啓明大学）は、日本の中高年の勤労意識を不安動因に駆られるものと見るより、刻苦勉励と勤める人たちと見た方がよいのではないかと、言う。

崔晩基氏（啓明大学）は、勤労者の行動や意識を説明するのに心理学的な立場に偏りすぎているか。不安解消が働く要因になるのも認めるが、それよりも社会的な上昇とか政治的文化的要素をも含めるべきであるとしている。そして、日本の社会は集団主義に基づいて機能しているものと、崔氏は見る。欧米とは違って、日本の会社の労働をする場合は、社会の場や生活の場と分離していないのではないかと。それゆえ、勤労者の意識のなかに、不安に駆られて労働をするというよりも、文化的な一体感に基づいて働くのではないかと。

西川憲二氏（桃山学院大学）は、経済学的な立場からみて実験心理学の鼠の実験のようにそううまくコントロールできないと思う。日本の勤労者の勤勉意識は明治以来百年近くにわたって築き上げてきたものである。それは、放っておいても崩れるものなのであるから、心理学的な立場からのみで遊べ遊べと言って、わざわざ崩す必要はないと、言う。

これらのコメントに対して西川一廉氏は、全氏には、欲求五段階説からでは説明しがたい、日本の勤労者の総てが私のような分析に当てはまるとは思いませんが、全ての労働者が自分の生活の充実を目指して働くことこそ大切で、自己犠牲のもとでこのままであれば将来の社会的生産性は達成されないと思うと、した。朴氏の言われる言葉は、心理学の達成動機になるとした。崔氏には、集団主義から日本的経営を説明することは理解できる、西川氏自身もかつてそうしていたが、それではなぜ集団主義という言葉が出てきたかということ、日本の職場では、集団から離脱することは勤労者に危機意識をもた

らし、不安動因となる。日本の高い経済成長は、歴史的な勤勉至上主義からくる集団の規範と複雑にからみあっているとした。また、西川憲二氏には、現代の中高年が満足をして働いていれば崩す必要はないが、精神病理学的事例の多さや中高年の自殺率の高さも日本の特徴である。このような中高年の現在のストレスをある程度和らげないと、日本の産業そのものがおそらく駄目になってしまう。確かに、一度下がった勤労意欲を取り戻すのはたいへんなことである。しかし、新人類の勤労意欲はどこまでも低下す

るものではなくて、自己犠牲を嫌っているだけなのであると。

これらの討議を終えて、司会者は、人間の行動というものが物的・生物的・社会的・心理的諸要因からくる制約を受けながら、共通目的に向かって一所懸命に努力をするものであるということが、洋の東西を問わず言えると思うが、西川一廉氏の今回の報告は事業経営における人間行動に心理学的な接近をなすという意味で有意義なものであったと思う。（榎本世彦\*）

---

\* 本学経営学部